

★支部大会研究発表題目

◎二〇〇二年秋季大会（11月2日、於・奈良教育大学）

・志賀直哉「和解」論 その空間を
読む：亀井千明（甲南女子大学大
学院）

・太宰治『陰火』論 不可解さを内
在する女性達：長原しのぶ（関西
学院大学研究員）

・小川国男『悲しみの港』 旅立て
ぬ男、あるいは陸封魚オйкаワの
悲しみ：石上 敏（大阪商業大学）

・樋口一葉「十三夜」をめぐる：
浅野 洋（近畿大学）

◎二〇〇三年春季大会（6月14日、
於・同志社大学）

・一九三〇年代へハイカイ運動の軌
跡 モダニズム詩人の周辺につい
て：西村将洋（同志社大学院）

・川端康成「青い海黒い海」論 融
解する身体：河野育子（神戸女子
大学大学院研究員）

・国木田独歩『酒中日記』論 今蔵
の日記を読む記者の視点に着目し
て：弥頭直哉（関西学院大学大
学院研究員）

・（内部）と（外部） 日本近代文学
に関する一素描：出原隆俊（大阪

大学）

★支部大会印象記——2003年度春
季大会から会員による印象記を掲
載することになりました。

二〇〇三年春季大会印象記

本年度の春季大会は、六月十四日
に同志社大学を会場として開かれた。
研究発表は全部で四本で、バラエテ
ィに富む内容であったが、私は主に
前半の二本について若干の印象を述
べることにする。

まず、西村将洋氏の「一九三〇年
代（ハイカイ）運動の軌跡」は、タ
イトルにもあるように、一九三〇年
代の俳壇及びモダニズム詩の世界に
おけるフランス（ハイカイ）の受容
のされ方を克明に分析し、「自己」を
映し出す鏡としての（ハイカイ）を
位相を明らかにしようとするもので
あった。まず、従来の研究では十分
に解明されていない点に焦点を当て、
豊富な資料に基づいて論証しようと
する意欲的な内容だったことが印象
に残る。特にモダニズム詩人の伝統
に帰ると、多文化の重なり合いの上
に成立する日本文化の特質の発見を呼
び起こす契機として（ハイカイ）が
果たした役割を炙り出したことは注
目に値すると思われる。ただ、西村
氏はモダニズム詩人達の意識が、同
時代の最先端にあると同時に伝統に
回帰して行く志向をも含んでいると
述べられたが、これらが時流とあい
まって結局のところいわゆる民族意
識の自覚という方向に収斂して行っ
たプロセスをより詳しく知りたく
思った。会場から出ていた「モダニ
ズムの弱さ」をどう考えるかという
質問を視野に入れてのさらに踏みこ
んだ考察を期待したい。

従来の川端研究であまり言及されて
こなかった「青い海黒い海」という、
初期のある種実験的な作品の分析を
通して、川端における身体の融合あ
るいは身体の拡大の問題を、万物一
如思想とからめて論じられたもので
あった。川端作品に特有の浮遊感覚
や、作中に客観的時間と主観的時間
が混在していることの指摘などは首
肯できるが、発表全体を通してやや
説明の不十分な点が目についた。そ
のため、個々の問題と問題の間の論
理的つながりがもうひとつ明瞭に見
えれば、自己の身体を無限に拡大し
たい「私」とそれを恐れる「私」と
の矛盾、葛藤を克服するために「言
葉」が必要だった」と氏は述べられ
たが、言葉の自立ということが自己
矛盾の克服ということがどのように
関係してくるのかについてはもう少し
し説明が欲しかった。また、会場か
ら出ていた同時期の川端の他の作品
との関連や、万物一如思想と「融解」
「浮遊」の位相の差異についてもさ
らなる考察が求められるところであ
ろう。

後半の二本についての具体的な評
は田中邦夫氏に任せるが、最後の
原氏の発表についてだけ一言述べれ
ば、非常にスケールの大きな問題提
起がなされた感があつて、あるテー
マについて作者や作品の枠を越えて
見えて来る大きな構図があるのでは
ないか、という問題意識から興味深
い発見がされるであろうスリリング
な予感がしたことを申し添えておく。
（梅本宣之）

本大会での各研究発表およびその
質疑応答は実り豊かなものであつた。
発表はいずれも、日本の近代文学に
おける伝統と近代との関係にさまざ
まな切り口で迫るものであり、私は、
その多様な方法に強い刺激を受けた。
ここでは、このような視点から本大

会の印象を記してみたい。

西村将洋氏「一九三〇年代（ハイ
カイ）運動の軌跡——モダニズム詩
人の周辺について——」。この発表は、
フランス・ハイカイの日本への影響
の内実を、雑誌『風流陣』を中心と
する詩人たちの動向や、春山行夫・
北園克衛らのナショナルリズムとの係
りで浮き彫りにしたものである。書
誌的資料も添付され手堅い発表であ
つた。特に、北園の「鯉」における
伝統的思惟と西洋的思惟との交差が
生み出す文化の雑多性の分析は、説
得力があった。

河野育子氏「川端康成『青い海黒
い海』——融解する身体」。発表は、
この作品が生み出す「浮遊感」の創
作手法を、まず語彙や文構造を通し
て、ついで川端の現実感覚や宗教的
意識との繋がりを通して、明らか
にしようとするものであつた。作
品のイメージを扱う研究は、読み手
の主観的要素が深くかわるが、そ
の確かさも感じられた。川端の「万
物一如思想」（近代的なニヒリズム）
と伝統的な仏教的思惟との関係（用
語と内実の問題）には多くの示唆を
得た。

弥頭直哉氏「国木田独歩『酒中日
記』論——今蔵の日記を読む記者の
視点に着目して——」。発表は「独歩
の運命観」・「今蔵の日記執筆意図」
・「受容せざるを得ない運命の直視」
に分かれる。独歩の運命観について
は、明治三〇年代の窮迫した生活と
その人生体験から来るものとの指摘
がなされた。質疑においては、「河霧」
との違いや都会での零落との関係が
問題にされ、その質疑応答において
も伝統と近代の関係の解明に深まり
があつた。日記形式とその日記を公
開する記者の眼との関係は、この作
品の構造を解明する上で大切な視点
である。氏は記者の今蔵評価に人間
としての権威の強調があることを指
摘された。大切な視点である。日記

形式に内在する作者（あるいは語り手）の視線との関係も大切であろう。出原隆俊氏（「内部」と「外部」）——

日本近代文学に関する一素描——。発表の視点は、作家の枠を越えて存在する共通した要素を考えることにあった。たとえば、氏によれば、従来の透谷研究では透谷像の中心に「内部生命論」「一夕観」「国民」などがキーワードとして置かれるが、透谷には束縛されているという意識があり、それがさまざまな観念として登場するのである。発表ではこのような視点から、近代の多くの作家の作品における「内部」と「外部」が浮き彫りにされた。この発表は「ひとつの結論を導き出すことは目指さない」ものであり、結論めいたものは示されなかった。そのため多くの質疑があった。たとえば、①近代日本の出発のあり方とのかかわり②日本近代文学の特徴・自然主義の展開の十分性との係わり③文学的装置とのかかわり、④表現と内実の関係など。この活発な質疑とそれに対する応答は、文学研究の根本にかかわり、きわめて有意義なものであった。私自身は、この発表に近代小説の「話型」あるいは、発想の構造といった新分野が拓かれる可能性を感じ、興深く拝聴した。

本大会の発表は、いずれも近代文学の伝統と近代の根本に触れるものであり、作品分析の深まりとそのアプローチの多様さは会場に強い刺激を与えるものであったといえよう。

（田中邦夫）

★研究会紹介

- ①主に関西で行なわれている研究会について、以下の項目順で紹介いたします（順不同）。
- ②会の名称
- ③代表者または事務局等の連絡先
- ④入会案内
- ⑤その他

- ①三重近代文学研究会
- ②半田美永研究室、〒516-8555伊勢市神田久志本町一七〇四、皇學館大学内、TEL〇五九六・二二・六四一〇

- ③入会は随時。開催は原則として七月、十二月の第二土曜日。
- ④特にありません。

- ①近代部会（大阪国文談話会）
- ②代表者 鳥井正晴、事務局 相愛大学文学部 日本文化合同研究室、〒559-0033大阪市住之江区南港中四・四・一、TEL〇六・六六一二・五九〇〇（代）

- ③漱石の作品を、章を追って、丁寧に読んでいく、輪読会です。
- ①文学論を読む会
- ②代表者 鳥井正晴、事務局 相愛大学文学部 日本文化合同研究室、〒559-0033大阪市住之江区南港中四・四・一、TEL〇六・六六一二・五九〇〇（代）

- ③パフチンを、輪読します。テキスト『パフチン言語論入門』（ミハイル・パフチン、桑野隆・小林潔編訳、せりか書房）
- ①島尾文学研究会
- ②代表 高坂薫、事務局 プール学院大学西尾宣明研究室、〒590-0114堺市榎塚台四・五・一、TEL〇七二・二九二・七二〇一

- ③事務局あて、連絡下さい。次回の研究会よりご案内を差しあげます。
- ④年二回の研究会を開いています。
- ②〇〇三年三月には奄美大島・名瀬市で第10回記念大会を開催しました。

- ①「三重近代文学研究会」
- ②「半田美永研究室」
- ③「入会は随時。開催は原則として七月、十二月の第二土曜日。」
- ④「特にありません。」

- ①「三重近代文学研究会」
- ②「半田美永研究室」
- ③「入会は随時。開催は原則として七月、十二月の第二土曜日。」
- ④「特にありません。」

- 著書名……『』
- 論文名……『』
- 掲載誌紙名……『』
- 注記等……（ ）

- ※著書、論文（その他を含む）の順にそれぞれ発表順に並べた。
- ※掲載誌紙の巻号数は省略し、原則として雑誌は発行月のみ、新聞は発行月日を記した。発行月のうち4月、12月は二〇〇二年、1月、3月は二〇〇三年のものである。
- 発行月ではなく月号数になっているものもある。

- ※原則として雑誌の編者名・発行所名は省略し、単行本の編者名・発行所名等は会員の届出に記載のあるもののみ記した。
- ※著書名・論文名・掲載誌紙名の用字は、原則として会員届出の記載に拠っている。

ア行の部

- 青木京子
- 「角力」論『太宰治研究』6月
- 「人間失格」の女性像―「暗夜行路」との比較を中心として『佛教大学大学院紀要』3月
- 「太宰治と絵画」―『斜陽』を中心として『昭和文学研究』3月
- 乾口達司
- 共著『横光利一事典』おうふう、10月
- 『花田清輝論―吉本隆明／戦争責任／コミュニケーション』柳原出版、2月
- 岩見幸恵
- 「猫楠・南方熊楠の生涯」―『ヘンラヘラヘラ』「妖怪画談」―『妖怪大裁判』「水木しげるの魅力」勉誠出版、7月
- 「商人文学」―『豊臣家の人々』「箱根の坂」『国文学解釈と鑑賞』司馬遼太郎の世界』7月

- 「永井荷風『すみだ川』再考―演劇との関わり、新派、歌舞伎、戯曲銀扇集」を中心に『親和国文』12月
- 大石加奈子
- 「活版所」の「平たい函」が示唆するテクストの運動性―『銀河鉄道の夜』にみる反転のダイナミズム―『国際文化学』9月

- 岡崎昌宏
- 「辻邦生『安土往還記』論―「孤独」と、「私」の崩壊―」『語文』5月
- 荻原桂子
- 「幽霊という狂気―漱石『琴のそら音』」『九州女子大学紀要』2月
- 「森鷗外『舞姫』序論」『九州女子大学紀要』9月

- 口頭発表「森鷗外『舞姫』における狂気の構造」日本文芸学会（於・帝塚山大学）、6月
- 口頭発表「日本近代文学の狂気―漱石と藤村操―」日本近代文学会九州支部（於・別府大学）、11月

- 奥野久美子
- 「戯作三昧―論（戯作者）と（芸術家）―」『国語国文』4月
- 「芥川龍之介『將軍』考―桃川若燕の講談本『乃木大将陣中珍談』との比較―」『国語国文』3月

力行の部

- 亀井千明
- 「志賀直哉「城の崎にて」試論―（私小説）（心境小説）神話の実態について―」『近代文学試論』12月
- 「志賀直哉「剃刀」論―アランチ・犯罪小説―」『甲南女子大学院論集創刊別文学・文化研究編』3月

川端俊英

国文』3月

○『「破戒」と人権』文理閣、3月

○「辻村乙未「無花果の村」を読む
—「処女地」同人の小説』『同朋大
学論叢』6月

○「部落問題文芸研究の現状と課題」
『部落問題研究』8月

○「右大臣美朝」—近習と公暁』『國
文學』12月

木村小夜

○「宮沢賢治の全童話を読む」の内、
「短篇梗概」等』『手紙一』、
「手紙三」「手紙四』『國文學』
2月

○「永捨から転捨へ—グスコンプド
リとグスコンプドリ』『国語国文』
3月

倉西 聡

○「伊藤整『得能五郎の生活と意見』
の成立」『武庫川国文』11月

○「資料紹介 福永武彦『忘却の河』
TV放送台本についてのメモ」(仮
題)『早稲田大学本庄高等学院国
語科文集』3月

小林幹也

○『モナコ小景』論『太宰治研究』
6月

齋藤理生

○「太宰治『畜犬談』論—方法とし
ての(笑い)—』『阪大近代文学研
究』3月

清水康次

○『「暗夜行路」第三』を読む—あ
やうさを潜めた好転—』『京都光華
女子大学研究紀要』12月

○『「暗夜行路」第四』を読む—心
という不合理なシステム—』『国語

真銅正宏

○共編著『小林天眠と関西文壇の形
成』和泉書院、3月

○「永井荷風、(へやつし)の姿勢—『ふ
らんす物語』から『四畳半襖の下
張』まで—』『国文学』7月

○「昭和国际学会とは 研究とは」
『昭和国际学会』9月

○「福永武彦『草の花』」椎名麟三
『美しい女』安森敏隆・吉海直人
・杉野徹編『キリスト教文学を学
ぶ人のために』世界思想社、9月

○「解説 湯浅克衛『半島の朝』湯浅
克衛『半島の朝』(文化人の見た近
代アジア3)ゆまに書房、9月

○「解説 小松清『仏印への途』小松
清『仏印への途』(文化人の見た近
代アジア18)ゆまに書房、9月

○「料理屋という固有名詞/永井荷
風『小説の世界(七)』—『人文学』
11月

○「永井荷風と伝統芸能」『国文学解
釈と鑑賞』12月

○「通俗小説の偶然性—横光利一—純
粋小説論—の偶然概念をめぐって
—』『人文学』3月

○「読者との「腕くらべ」—花柳小
説というジャンル—』『同志社国文
学』3月

○口頭発表「交渉と交雑の環境—京
・大坂の文学と義太夫・地歌—」
昭和文学会秋季大会(於・仏教大
学)、11月

高松敏男

○「書誌づくり、この厄介なもの—
ニーチェ書誌作成体験記—』『文献
探索2001』7月

田中邦夫

○「「明暗」(フランス料理店の場面)
と構想メモとしての五言絶句—作
者漱石の視点と小林・津田の形象
—』『大阪経大論集』1月

○「「明暗」における小林の造型と七
言律詩—「明暗」の創作方法—」
『大阪経大論集』3月

塚田満江

○「自然風土と人間風土—幸田文の
人と文学—』『日本文学風土学会紀事』
10月

外村 彰

○「近江の詩人 井上多喜三郎」サン
ライズ出版、12月

○「井上多喜三郎著述年表稿」『大阪
産業大学論集人文科学編』6月

○「岡本かの子『河明り』—我執か
ら包容へ—』『立命館文学』7月

○「月刊『苑』細目』『昭和文学研究』
9月

○「井上多喜三郎書目稿」『滋賀大國
文』9月

○「註釈「美濃部達吉」『退官雑筆』」
上田博ほか編『随想選 サフラン
沈黙と思索の世界へ』嵯峨野書院、
10月

○「星川清躬と室生犀星」『室生犀星
研究』10月

○「「月曜」『春聯』ほか細目稿—井
上多喜三郎発行誌総覧—』『大阪産業
大学論集人文科学編』10月

○「時代人物 森有礼・新島襄・植木
枝盛・河竹黙阿弥」『演劇』上田博
・滝本和成編『明治文芸館II』嵯
峨野書院、10月

○「井上多喜三郎参考文獻目録稿」
『京都学園中学校論集』12月

○「時代に埋もれた田園詩人」『日本
経済新聞』2月20日

○「詩人 井上多喜三郎をたずねて」
その1〜5『広報あづち』3〜7
月

鳥井正晴

○「明暗評釈 第一巻 第一章〜第四
十四章」和泉書院、3月

東口昌央

○「高橋和巳『邪宗門』論—(組織)
への反措定—栗原幸夫編『文学史
を読みかえる6大転換期60年代の
光芒』インパクト出版会 1月

中村美子

○「幻惑」としての読み—漱石の『文
学論』を手がかりとして—』『国文
論叢』(京都女子大学大学院研究科
研究紀要) 3月

永井敬子

○「刺青」論—娘への(転身)の物語
—』『日本文藝研究』12月

永栄啓伸

○「芸談」に見られる時代意識—谷
崎資料考(三)・逸文・当道—を添
えて—』『解釈』7月

○「書簡に見る谷崎潤一郎(2)—
昭和九年・松子との同棲発覚を中
心に—』『皇学館論叢』10月

永瀧朋枝

○「北村透谷「文学」・恋愛・キリ
スト教」和泉書院、8月

○「透谷の読者—藤村『春』が出る
まで—』『国語国文』3月

生井知子

○「志賀直哉と武者小路実篤—その
友情のはじまりをめぐって—』『国文
学』4月

○「大正六年の志賀直哉—調和的心
境という神話をめぐって—』『国語
と国文学』10月

『文学』3月

『文学』3月

『文学』3月

『文学』3月

『文学』3月

西尾宣明
○共著『芥川龍之介大事典』勉誠出版、7月
○共著『プレゼンテーション演習』樹書房、10月

西村将洋

○「ポエジイ・ポリテイクス―モダニスト保田與重郎の肖像―」『日本近代文学』10月
○「解説 長谷川春子『北支蒙疆戦線』竹松良明監修『文化人の見た近代アジア』第八巻 北支蒙疆戦線」ゆまに書房、9月

○「解説 縫田栄四郎・志賀重昂・山岡光太郎・笠間泉雄著『波斯より土耳其まで』竹松良明監修『文化人の見た近代アジア』第二四巻 波斯より土耳其まで」ゆまに書房、9月

○「雑誌『コギト』とドイツ文学研究―新即物主義を起点として―」『社会科学』(同志社大学人文学研究所) 1月
○「おく霜」、『少年文集』所収の作品」、『よしあし草』所収の作品」真銅正宏・田口道昭・檀原みずず・増田周子編『小林天眠と関西文壇の形成 上方文庫26』和泉書院、3月

西村好子
○「寂しい近代―満韓とこころぐく―」『国文学論叢』8月

信時哲郎
○「(こ)らはみな手を引き交へて」共著『宮沢賢治 文語詩の森 第一集』柏プラノ、7月
○「新刊紹介 近藤晴彦著『宮澤賢治への接近』『国文学解釈と鑑賞』8月
○「卒論を発表しよう」共著『プレゼンテーション演習Ⅱ』樹村房、9月
○「宮澤賢治「文語詩稿五十篇」評

釈(4)『神戸山手大学紀要』12月
○「カフェロロジー」神戸『神戸山手セミナーブック』3月

八行の部

橋本寛之
○『都市大阪〇文学の風景』双文社出版、7月

半田美永
○「佐藤春夫研究」双文社出版、9月

○「共編『紀伊半島近代文学事典―和歌山・三重―』和泉書院、12月
○「森敦と阪中正夫―小説『玉菊』の背景―」『解釈』1月
○「阪中正夫生誕百周年記念事業に参加して」『いずみ通信』7月

細江 光

○「上山草人年譜稿(三)―谷崎潤一郎との交友を中心に―」『甲南女子大学文学部研究紀要』3月
○「谷崎全集逸文二篇」『甲南国文』3月

○「『黒犬』に見る多重人格・催眠・暗示、そして志賀の人格の分裂―付録』麻布老婆殺し事件関係資料」『甲南国文』3月
○「名作鑑賞―森鷗外『花子』」『日本文芸論叢』和泉書院、3月

マ行の部

増田周子
○「共編著『小林天眠と関西文壇の形成』和泉書院、3月

○「宇野浩二の笑い―龍介の天上―をめぐって―芥川龍之介との関連から―」『笑いと創造 第三集』勉誠出版、2月
○「大患期の宇野浩二」『大正文学』

9月
○「宇野浩二未発表書簡・印南寛宛二十五通」『国文学』(関西大学) 2月
○『紀伊半島文学事典』(和泉書院)の項目執筆、12月

三品理絵
○「問いつめ、引き裂く花―泉鏡花「菊あはせ」論」『論集昭和期の泉鏡花』おうふう、5月

宮内淳子
○「遠近法の壊し方―藤枝静男の場合―」『日本文学』11月

宮川 康
○「日本近代文学の中のアジア―武田麟太郎『ジャワ更紗』を教材として―」『研究紀要』(大阪教育大学教育学部附属高等学校池田校舎) 5月

ヤ行の部

屋木瑞穂
○「樋口一葉「暁月夜」の技法―古典文芸復興の機運のなかで―」『解釈』4月
○「都の花」における「閨秀小説」女性作家と雑誌メディア―『阪大近代文学研究』3月

山本 洋
○「フェノロサ夫人『日本庭園の花々』(二)―『ロータス』4月
○「一葉の男性問題(一)―」『論集樋口一葉Ⅲ』おうふう、9月

吉岡由紀彦
○「『羅生門』研究史・続―三好行雄の『人間悪』『存在悪』―」『SO LITUDE』4月
○「美的対象」における「結構」と「構成」との区別の重要性」『批評

理論研究』5月
○「(主)題論(テーマ批評)のリアー作品の倫理的要素を浮上させる『再話』の意義と限界」『GET OVER』8月

吉川仁子
○「芥川龍之介『玄鶴山房』考―阪本龍門文庫蔵自筆原稿の検討を通して―」『叙説』(奈良女子大学) 12月

ワ行の部

和田芳英
○「ロシア文学者昇曙夢&芥川龍之介論考」和泉書院、3月
○「ロシア文学者、昇曙夢のソ連観―昭和四年の講演資料紹介―」『叢』3月

★関西支部ホームページ

http://www5c.biglobe.ne.jp/~kindai/

★関西支部メールアドレス

kansai.shibu@ri.biglobe.ne.jp

日本近代文学会関西支部会報

第七号

二〇〇三年八月三十日 発行

発行所 日本近代文学会
関西支部事務局